

論 説

## 聖職者は戦場にむかうカトリック青年平信徒に 何を望んだのか

—パンフレット『君の背囊のなかに…』(1938年出版)  
をめぐって—考察—

渡 邊 千 秋\*\*

はじめに

『君の背囊のなかに…』は、ビトリア司教区の在俗聖職者レオナルド・ウルテアガが執筆したパンフレットである<sup>1)</sup>。スペイン内戦下の1938年に出版され、同年中に2刷目が発行された。内戦下で出版されたパンフレットとしては、よく読まれた部類に入るであろう<sup>2)</sup>。内戦の行方を大きく左右した北部戦線がフランコ陣営側の勝利で終結した1937年夏をこえて、1938年前半に、バスク地方ビトリア市にあった社会カトリック出版社から発行されたことを鑑みると、戦闘が終結して「非戦地」となった北部からフランコ陣営にあらたに加わる青年を主たる読者と想定して書かれたものであると考えられる。本稿では、パンフレットにおける言説の展開に注目しつつ、アクション・カトリカの指導者でもあった在俗聖職者が、平時ならば自分の手足となり教区教会を盛り上げてくれたであろう青年平信徒に対し、どのような心構えて戦争に臨むよう説いていたかを考察したい。

\* 本論文はJSPS 科研費 18K01040 の助成を受けたものです。

\*\* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) Leonardo URTEAGA: *En tu mochila...*, Vitoria, Editorial Social Católica, 1938.

2) 出版側は、兵士の反応が良いので行われた第二刷についても売り切れを予想していた。  
*Signo*, 42, 12 febrero 1939, p.2.

執筆の背景：内戦でバスク地方が置かれた状況

スペイン内戦においては、トレード首座大司教であったゴマ枢機卿を筆頭にスペイン・カトリック教会の主な聖職者は反乱軍陣営を支持した。他方で、一般にカトリック的な地域であることが強調されるバスク地方のカトリック教会では、実際には反乱軍への盲目的な支持を示すことには懐疑的である聖職者や平信徒が多く存在した。

第二共和政期には、アラバ・ギプスコア・ビスカヤにまたがるバスク地方のビトリア司教区全体において、近代化とともに世俗化の波が押し寄せていたことは、司教区が発行する雑誌『イデアリウム』に集う聖職者が行った宗教社会学のパイオニアともいえる研究活動により明らかであった。都市部なのか、鉱山地域なのか、農村なのか、といった地域社会の状況によって人々の宗教的状況も大きく異なっているなかでも、バスクの聖職者は、世俗化が進展する現実を直視した。その上で、彼らは宗教が人々の心性に及ぼす影響を調査し、司牧活動に活かそうとしたといえよう<sup>3)</sup>。

地域の政治をリードしていた宗教政党、バスク・ナショナリスト党は、バスク・ナショナリズムと民主主義、そしてカトリシズムとを結びつけた。伝統主義やカトリック的原理主義の立場をとる人々もいれば、無神論者もいるバスク地方で、バスク・ナショナリスト党はキリスト教民主主義に活路を見いだし、近代的な政党に変貌したのである<sup>4)</sup>。

そして、内戦勃発時、ホセ・アントニオ・アギーレを中心とするバスク・ナショナリスト党指導部は、バスクの自治を獲得するために共和国陣営側を支持した。ただし、ギプスコアやビスカヤのリーダーは自治政府をうまく着地させることに協力的であったが、アラバのリーダーはこれに反対し、党内が分断された。

---

3) Francisco José CARMONA FERNÁNDEZ: “Autocrítica del catolicismo español, sociología religiosa y acción pastoral” en Feliciano MONTERO y Joseba LOUZAO (eds.) *Catolicismo y franquismo en la España de los años cincuenta. Autocríticas y convergencias*, Granada, Editorial Comares, 2016, p.62.

4) Leyre ARRIETA: “El nacionalismo vasco y Jacques Maritain (1936-1945)”, *Ayer*, 113 (2019), pp.190-192.

このような状況を前に、当初反乱軍側は、バスク・ナショナリストである教会聖職者を、バスクの自治独立を求める勢力を懐柔・説得するために利用しようとした。しかし、1936年10月にバスク自治政府が成立して以降は、バスク・ナショナリストである聖職者は反乱軍陣営から迫害されることとなった<sup>5)</sup>。

高位聖職者として非政治主義を貫いてきたビトリア司教ムヒカは、パンプローナ司教オラエチェアとともに、1936年8月の自分たちの司教区の信徒に向けた共同司牧書簡で、共産主義との共闘は認められないことを示した。とはいえ、ムヒカは、書簡の流布には積極的ではなかった。そのため、反乱軍側はムヒカの更迭を求めてトレード首座大司教に圧力をかけたほどである。ムヒカは、自分の管理下にあったバスク・ナショナリストの聖職者を庇護しようとしたことにより、彼らの反乱軍に対する抵抗を助長し、ビトリア司教区の神学校をバスク・ナショナリズム運動の巣窟にしたという非難をうけた<sup>6)</sup>。

トレード首座大司教の画策を通じて、ムヒカはビトリア司教を辞任し、1936年10月ローマに居を移した。しかしムヒカは、バスクの状況を見守り続け、バスクでおきた反乱軍陣営による聖職者殺害を非難し、抗議する文書を教皇庁に提出した<sup>7)</sup>。また、1937年7月にトレード首座大司教ゴマ枢機卿が執筆して出されたスペイン司教団集団司牧書簡に、ムヒカは署名していない。その後、ムヒカは一時的にベルギーへ、そしてフランス側のバスクに居を移したが、スペインへの帰国は1947年まで許可されなかった<sup>8)</sup>。

このように、スペインの、そしてバスクの教会聖職者のあいだでは、バスク・ナショナリズムをどう支持するのか、もしくは支持しないのか、という点をめぐって、意見が分かれていた。ここで本稿が言及するパンフレットの著者

---

5) Romina de CALI: “El caso Múgica y la persecución del clero nacionalista vasco durante la guerra civil española: El punto de vista -contradictorio- de la jerarquía eclesíástica”, *Historia Actual Online*, 43-2(2017), pp.91-92. <https://dialnet.unirioja.es/descarga/articulo/6339889.pdf> (最終確認日: 2022年7月31日)

6) Miguel Ángel DIONISIO RIVAS: “El cardenal Gomá y la cuestión vasca”, *Hispania Sacra*, LXIV Extra I(2012), pp.262-270.

7) *Ibid.*, pp.272-274.

8) *Ibid.*, p.283.

で在俗司祭であったウルテアガに目を向けておきたい。ウルテアガは、1896年バスク地方ビリャフランカ・デ・オルデシアに生まれた。ピトリアにあった神学校に学び、叙階されたのち、1923年ギプスコアの街イルンにあるビルヘン・デル・フンカル教区教会の助任司祭に任じられた<sup>9)</sup>。その後、1938年にはサン・セバ스티アンのサン・ビセンテ教区教会で司牧活動を行っていた記録があり<sup>10)</sup>、また1939年にはピトリア司教区におけるアクシオン・カトリカ青年部の聖職者顧問に任命された<sup>11)</sup>。在俗聖職者として、バスク社会の宗教的特質を十分に理解していた人物である。なお、北部戦線終結後には、ピトリア神学校校長の命を受けて、フランス側バスクに滞在していたムヒカに、戦闘は終わっているがフランスに留まるよう進言をするため出向いた人物でもあったことを付け加えておきたい<sup>12)</sup>。

#### 在俗聖職者ベギリスタインによる推薦をうけたパンフレット

パンフレットの冒頭には、当時ナバーラで司牧活動を行っていた在俗聖職者、サントス・ベギリスタイン・エギラスが記した推薦文が掲載されている<sup>13)</sup>。出版時のベギリスタインは、アサグラ教区助任司祭であり、パンプローナ司教区でのアクシオン・カトリカ聖職者顧問であった<sup>14)</sup>。パンフレット出版前夜の1938年4月には、司教オラエチェアの支持をうけ、ナバーラのイラチェ修道院<sup>15)</sup>でアクシオン・カトリカ青年部（以下「青年部」と略記）の主催による聖職者週間を開催した人物の一人である<sup>16)</sup>。また自らは、『司祭たちへ：教

9) Juan José ALZUGARAY AGUIRRE: *Penúltimas voluntades*, Madrid, Ediciones Encuentro, 2005, p.231.

10) Leonardo URTEAGA: “Sábado de Gloria”, *Signo*, 24, 8 mayo 1938, p.2. ウルテアガの署名記事の記述に基づく。

11) *Signo*, 42, 12 febrero 1939, p.2.

12) Romina de CALI, *op.cit.*, p.96.

13) 1908年にアルゼンチンで生まれたベギリスタインであるが、彼が4歳の時に家族でスペインへ移住した。パンプローナの神学校に進み、ローマの教皇庁立グレゴリアン大学で博士課程を修了、1932年にナバーラへ戻ったという点で、この地域と縁の深い人物である。

14) L. URTEAGA: *En tu mochila*..., p. II.

区教会セントロへむかって』というパンフレットを執筆し、「青年部」の教区セントロ設立を聖職者顧問の立場から促した<sup>17)</sup>。内戦によるメンバーの離散、激減、組織崩壊の危機を乗り越え、立て直しを図る「青年部」にとっては、彼は平信徒メンバーとほぼ同世代に属することもあり、在俗聖職者のリーダー的存在であったといえる<sup>18)</sup>。

さて、ベギリスタインは、冒頭で以下のように述べる。

青年は出征にあたって自分の心を落ち着かせてくれるものをたくさんもっていく、たとえば櫛、ボタン、防寒帽や村のチョリソ<sup>19)</sup>などがそうだ。そしてこの『君の背囊のなかに』を持参することで、ここから先、素晴らしい友人をも連れていくことになる、君のことをよく助けてくれるはずだから。時間は十分にある。しかもだいたいうまく使えていない。だから、休憩の時間をちょっとだけこのパンフレットを読むことにあてたまえ。ゆっくりと読みなさい、ことばからことばを、魂に落とし込むのだ。そうすれば君の若い視野に新しい地平が見えることだろう。君は単に戦うために戦うのではない。祖国から悪辣な原因を一掃するために戦うのだ。そしてそのあとにも、やるべきことはたくさんある。私たちが栄光にみち、内部の均衡のとれた、喜ぶべき労働のある、愛のある、家庭的な、文化的なそして偉大なスペインへとたどり着くまでには。未来を紡ぐために、戦争で経験する神聖なすべての努力を積み重ねるのだと考えなさい。君たちは喜びのうちに戦争から戻ってくるだろうから<sup>20)</sup>。

---

15) イラチュ修道院には、内戦中の1937年6月から1939年5月まで、フランコ陣営側によって強制収容所が設けられていた。<http://www.loscamposdeconcentraciondefranco.es/campos/278> (最終確認日: 2022年7月31日)

16) Vicente CÁRCCEL ORTÍ: *Diccionario de sacerdotes diocesanos españoles del siglo XX*, Madrid, Biblioteca de Autores Cristianos, 2006, p.214.

17) Santos BEGUIRISTÁIN: *A los sacerdotes. Hacia el Centro Parroquial*, Valencia, Imprenta la Semana Gráfica, 1938.

18) またベギリスタインは、フランコ独裁体制下では、バスク・ナバラ地方におけるカトリック教会内での権威となり、体制協力を行った。体制末期には情報部の宗教顧問であった。Feliciano MONTERO: *La Iglesia: de la colaboración a la disidencia (1956-1975)*, Madrid, Ediciones Encuentro, 2009, p.311.

19) 豚肉と香辛料を用いた腸詰の一種。

20) Santos BEGUIRISTÁIN: “Prefacio”, L.URTEAGA: *En tu mochila...*, pp.I-II.

ここでベギリスタインが想定している読者は、フランコ陣営側で戦闘を勝ち抜き、喜びとともに日常にもどるはずの青年であるといえるだろう。彼は続けて、以下のように書き、戦闘を生き抜いて日常に戻ったあとにはスペインを再建するための任務が待っていることをほのめかす。

いなくなった者に目を移してみよう。最良の者たちが、たくさん、神にむかって飛び去った。しかし君たちは戻ってくるだろう、戻ったら、王たるキリストの栄光のために、スペイン的な、そして君たちの役に立つ英雄的青年組織のことを考えねばならない。鐘樓の鐘を鳴らし、ここにおいてになる神に指をさして告発しつつ、勇気ある者たちはスペインの全ての荒れ地を征服するために向かおうと、福音とご聖体を飲み干すのだ。私たちの祖国には、なんとたくさんの神のいない地があることだろう。君たちが、肉体だけになって、頭は理想をなくし、身体は疲れ果て、魂の灯が消えて戦争から戻ってくるなら不毛なことになってしまう。レオナルド神父は君たちのことをよくわかっていて、さまざまな美しい思考を君たちに提示してくれる。それを反芻しながら、みずみずしい精神を保つのだよ。戦後が私たちを待っている、スペインを再征服するための手間のかかるたいへんな仕事が控えているのだから<sup>21)</sup>。

このように、戦争における死者を読者に想起させるベギリスタインであるが、想定読者としての青年に向けるまなざしはどちらかというとならぬ戦後にむいているように見える。日々、戦場で死に直面する青年の心のケアの重要性をどの程度理解していたのかは不明である。ともかくも、勝利の後に青年が戦地から戻り、新たに、カトリック的な祖国を建設することを望んでいたことは明らかである。

#### 筆者自身による序文の意義

ベギリスタインが記したような、戦後の「青年部」組織の再建を目標に定め

---

21) Ibid, p.II.

て現在を戦うという思考を別の形であらわしたのが『君の背囊のなかに』である。著者であるレオナルド・ウルテアガは、ベギリスタインよりも具体的にパンフレットの読者層となる兵士を想定していた。それは、彼が以下のようにパンフレットの冒頭を書き始めていることに明らかである。

君の背囊のなかに、祖国の戦士よ、常にこのパンフレットを持ち歩きなさい。戦闘が止んだ折りに読みなさい。見張りに立つときには、新しき者たちよ、国の約束の中で燃え上がるような地平線の光に向かって、このパンフレットの内容について話しなさい。ここに書かれているのは率直な意見であり、また著者のつたない思想である。が、このパンフレットは控えめにいっても野営での精神をととのえるだろうし、軍人手帳の先達にもなろう。前衛で勝利をおさめる青年たちよ、君たちが新たな大衆のための種となるように、また家庭の父としてその手を光で満たして、偉大な、そしてキリスト教的なスペインのために働くよう願ってやまない<sup>22)</sup>。

このように、ウルテアガは、前衛での実戦に赴く兵士を読者として想定している。軍人手帳といっしょに背囊にいれて持ち歩き、パンフレットを知らない者にも内容を語るように呼びかけていることから、戦地での利用が念頭にあることは明らかであろう。パンフレットを読む兵士は、カトリック的であり、祖国を守る者であるという認識ももっている。また読み進めると「君は人生始めの20年くらいを既に過ごした」という文章も見られ、兵士のなかでも入隊してから日の浅い青年を読者ターゲットとしていたことがわかる<sup>23)</sup>。

序文には、執筆要請があったと想定される具体的組織、「青年部」の名称はでてこない。しかしパンフレットの他の箇所では、「青年部」についての言及が複数みられる。また、パンフレットの出版後には、「青年部」の機関誌であった『しるし (Signo)』が、この新たな出版物について「100%キリスト教的でスペイン的な兵士になることを教えてくれる」パンフレットであるという宣

22) L. URTEAGA: *En tu mochila*..., s.n.

23) L. URTEAGA: "Tu juventud", *En tu mochila*..., p.29.

伝をうっていること<sup>24)</sup>、パンフレットの項目の文章が『しるし』にそのまま引用・転載されていること、またパンフレット販売にあたって、「青年部」が自らの事務局にて注文を受けつけていること、などからも、パンフレットの流通には「青年部」が積極的にかかわっていたと判断できる<sup>25)</sup>。

パンフレット執筆当時のウルテアガは40歳代前半である。これは、実際に出征する青年兵士の年齢の中間値よりも年上であることを示す。その意味で、ベギリスタインと比較すると一層のこと、青年兵士との世代間ギャップがあったことが想像できる。ウルテアガ自身は、従軍司祭ではなかったようであり<sup>26)</sup>、ピトリア司教区をみまった激しい戦闘を生き延びた在俗聖職者として、フランコ陣営で戦う青年兵士へあててことばを送ったと思われる。北部戦線が一応の終結をみたのち、ウルテアガは「青年部」に所属していた軍曹が一時的にサン・セバ스티アンで設置した「青年部」セントロの運営を援助した。その経験を通じて、後衛にいる者が従軍司祭を援助する必要性に気づいていた人物でもあったといえる<sup>27)</sup>。

### パンフレットの構成について

それでは、パンフレットで扱われた項目についてみてみよう。ちなみにパンフレットは縦17センチ横11センチの大きさで、全112ページで構成されている。50をこえる項目を扱い、それぞれに対する文章は長くとも見開き2ページ分に収まるようになっている。以下、項目タイトルを掲載順に訳出する。

「神」「君の祖国」「君の上官」「戦争」「スペインの戦争」「この戦争の教え」

---

24) たとえば「君の恋人」Signo 24, p.4

25) *Signo*, 31, 28 agosto 1938, p.3. この当時、アクション・カトリカ青年部の事務局はフランコ陣営の中樞が置かれていた北部の街、ブルゴスにあった。またパンフレットは1部0,75ペセタで販売された。

26) 管見の限りでは、該当する記録は見つからない。

27) Leonardo URTEAGA: “Del Centro de Transeúntes de San Sebastián”, *Signo*, 19, 27 febrero 1938, p.2.

「君の持ち場」「君の宗教」「君の確信」「君の理想」「君の将来」「君の犠牲」  
「君の若さ」「感染症」「人生の法則」「君の敵」「弱さなのか?」「君の恋人」  
「君の祈り」「君の告白」「君の天国への黄金の鍵」「君のミサ」「君の聖体拝  
領」「君の十字架」「君の乙女」「君のロザリオ」「君の家庭」「君の両親」「君  
の教区」「君の聖職者顧問」「君の読書」「宗教は単なる儀式ではない」「ピオ  
11世の苦悩」「非難された共産主義」「キリスト教的な文明をどう救うか」「社  
会的宗教」「青年たちの脱走」「教区の青年」「教区青年部における若者の人格  
形成」「憎むな」「残酷になるな」「使徒になれ」「君の使徒職」「正直であれ」  
「よき人間であれ」「喜んでいなさい」「仕えよ」「君の会話」「君の言葉の使徒  
職」「宗教議論」「君の昇進」「君の従軍司祭<sup>パニテラ</sup>」「心を救え」「寛大であれ」「修道  
士?」「勇気を持って」「君の死」「君の死はどのようであろうか」「君の勝利」

全体をみて、目立つのは、親しい間柄でよく用いられる2人称単数形の所有  
形容詞前置形である“tu/tus”、「君の」という意味の単語が30回ほど、半数  
以上の項目タイトルに用いられていることである。この頻度の高さは、まさに  
顔の見えない読者を非常に近い人物として想定し、彼らに呼びかけようとし  
ている著者の意図を読みとることができる。

なによりもはじめに神に言及し、戦闘を正当化する

個別の項目のなかでは、まず初めに「神」について述べる。読者に対して、  
神の命に従うべくして戦線に参加していることを説き、以下のように呼びかけ  
ている。

戦争の鋭いラッパの音で、神は君を兵士の部署にお呼びになった。神が  
いなければ、祖国も、名誉も、良心も、みな中身のないことばである。  
軍の価値すらもむなしくなろう。神なしに君は世界の存在を説明できな  
い。(…中略…) 君の創造主、君の御父のために尽くしなさい。君は常に  
神の命に従わなくてはならない<sup>28)</sup>。

28) L. URTEAGA: “Dios”, *En tu mochila*..., p.9-10.

このように神こそが君に兵士としての召命を与えたのであるから、その呼び声にこたえて、神に尽くして従わねばならないとする。神の存在こそが、戦闘に出る原動力だと、最初に提示しているのである。青年に、自分たちが兵士として命をかけるのは神のためであることを、なによりもまず確認させるのであった。

続いて、項目「君の祖国」で、祖国は神の次に偉大なもの、人々を偉大にする存在であると論じる。青年自身が祖国であり、神の似姿である青年は、自分を愛するのと同様に隣人を愛さなくてはならない。祖国にあって他の人々と調和の中に共に生きるための共通点である、高貴でキリスト的な推進力は今やだらけてしまったので、それを再度緊張状態に置かねばならないという。この戦争は近い将来終わるであろう、しかし今は兵士として、祖国スペインを愛せ、という。そして、青年が戦争で差し出すものすべては青年自身よりも価値のあるものだと述べる<sup>29)</sup>。

続く「君の上官」では、「青年部」ですべての権威は神より来ると教わったはずであることを読者に思い起こさせる。だからこそ、軍規はなにかしら厳しく冷たいものに思えるかもしれないが、スペインを再征服し偉大な国家にするために、上官には従わねばならないとする<sup>30)</sup>。この項目で「青年部」にはじめて具体的に言及したウルテアガの記述から改めて、コアな読者層として「青年部」会員を念頭においていることがうかがえる。

項目「戦争」では、世界のためには軍隊が存在しないことが理想だろうが、実際は国民生活の安全はなんらかの方法で保障されねばならないので軍が存在する、とカトリック教会は考えているという。だからこそ本当の祖国愛とは「戦争反対、軍隊反対」と集会で叫ぶことではなく、個人・社会階級・民族・人々のあいだでの恩恵を求め、お互いの間での正義を増すために働くことである。またそのために何をすべきかについては、読者は「青年部」の研究サー

29) L. URTEAGA: "Tu Patria", *En tu mochila*..., p.11-12.

30) L. URTEAGA: "Tus jefes", *En tu mochila*..., p.13-14.

クルで学んだはずであると述べている<sup>31)</sup>。

そして神が今回のスペインの戦争で青年を戦わせる理由について、トレード首座大司教ゴマ枢機卿が執筆した司牧書簡を援用して示す。この戦争は人民のものでも国民のものでもない、共和派のある種の階層に属する人々はそうあってほしいと望んでいるが、実際には人々は共和国のために戦っているのではない。この残忍な戦争は基本的には原則、原理、生きるための理念、社会的な事実などの対立による戦争である。ある文明と別の文明との対峙による戦争である。マルクス主義的共産主義に対する戦いなのだ、と主張する。

その上で、1936年7月の軍部による蜂起と、それに続く時間の流れが、祖国愛の深い感情を引き起こしたのだ、と指摘する。蜂起したフランコ陣営が展開する国民運動は宗教と祖国に由来するものである。ウルテアガは、神のご加護がなければこの戦争はフランコ陣営側にとってすでに失われたものとなっていたであろうが、そうではない、つまり神のご加護に支えられているからこそ戦争は継続していると考える。そして、戦争はキリスト教的な人々の魂を揺り動かしたのだと確信する<sup>32)</sup>。この戦争は国民が悪徳と罪から清められるようにと神が許した必要悪であるのだから、我々は誤りを正さなければならないと主張する。全世界的な危機に関するローマ教皇の声、つまり諸問題への永遠の解決策はイエズス・キリストと福音の精神であるとする教皇の声を聞け、と呼びかける<sup>33)</sup>。

この戦いは共産主義に対する戦いである

ウルテアガは教皇ピウス 11 世のことばに基づき、現在の諸悪の根源は共産主義であると書いている。ここで改めて注目したいのは、戦争における敵は政体としての共和国であるとは断言しておらず、イデオロギーとしての共産主義を実際の敵として提示したことである。興味深いことに、聖職者殺害や教会建

---

31) L. URTEAGA: “La Guerra”, *En tu mochila*..., pp.15-16.

32) L. URTEAGA: “La guerra de España”, *En tu mochila*..., pp.17-18.

33) L. URTEAGA: “La lección de esta guerra”, *En tu mochila*..., pp.19-20.

造物の破壊などといった共和国陣営における反教権主義的暴力の拡がりについては、このパンフレットではほとんど触れられていない。ウルテアガは、そのような具体的な事件には極力触れずに、共産主義に立ち向かうため、信仰自体をまもるための戦いの必要性を強調してこの戦争を正当化する<sup>34)</sup>。こうして、おそらく回勅を読まないであろう青年にも、ピウス 11 世の回勅『ディヴィニ・レデンプトリス』を紹介し、教皇の声を聞かせようとした<sup>35)</sup>。

ウルテアガは、ピウス 11 世の言として、暴力的な嵐や迫害の風に長いあいだ耐えるためには真実のもとに信仰を生きなければならない、と指摘する<sup>36)</sup>。教皇は共産主義に対するどんなに漠然とした参加・協力をも徹底的に否定している。共産主義は今や人々の経済的・政治的解決策となろうとしているのだから、カトリック教会はそれに対抗して社会的なプログラムを実行にうつすために広範な活動を組織しなくてはならない。現在の戦争は、私たちの祖国を奴隷にしようとするボルシェビズムに対抗するための戦争であり、我々の勝利に終わるだろう。しかし、青年は勝利の翌日から、カトリシズムに基づく社会的プログラムを広めるため、キリストの使徒にならねばならない<sup>37)</sup>。そして、キリスト教的な文明を守る使徒となるのは、聖職者、アクション・カトリカの闘士、すべてのカトリック平信徒のなかでもよき意志を持つものたちである。だから当然、青年にも使徒となることが求められているのだ<sup>38)</sup>。

ウルテアガは、他の聖職者の著作からも援用して議論を続けた。たとえばバスク出身のイエズス会士であるレミヒオ・ビラリーニョの『陽光』はその一例である<sup>39)</sup>。ビラニーニョを引用しつつ、ウルテアガは、兵士の持ち場に上下はなく、たとえ勲章を与えられずに戦死するとしても、青年は自分の持ち場で

34) Ibid.

35) 本回勅第 20 項でピウス 11 世は「スペインにおける共産主義の暴虐」に言及した。特に内戦下で聖職者やよき平信徒たちを殺害された理由として、「無神論に反対したという一事だけ」と非難を強めた。ピオ 11 世（岳野慶作訳）『ディヴィニ・レデンプトリス：無神的共産主義』中央出版社、1959 年、pp.46-47.

36) L. URTEAGA: “Una queja del Papa Pío XI”, *En tu mochila*..., p.66.

37) L. URTEAGA: “El comunismo condenado”, *En tu mochila*..., pp.67-68.

38) L. URTEAGA: “¿Cómo salvar la civilización cristiana?”, pp.69-70.

は神の、そして上官の代理人であるという。最終的な勝利は、スペインを再征服するために何かを行おうとするすべての人々の努力の総体から成る、と言って青年を励まし、戦地へ送り出そうとする。この戦争において兵士となることは、たとえ犠牲を払ってでも行わねばならないもの、「青年部」や両親が教えてくれた義務の実践にあたるとうのである<sup>40)</sup>。

ウルテアガは、「君の宗教」という項目で、戦争が起きたのは、労働者大衆や、富裕層の宗教に関する無知が原因の一つであり、信仰の基礎を見直すことが必要であると記す。そして兵士である青年読者にむけて、宗教的人格形成に戦地での時間を活かすことを勧める。自分の周りで宗教的人格形成を手伝ってくれそうな人を探し、また出身セントロの聖職者顧問や教区司祭を頼って本やパンフレットを送ってもらうようにと提案する<sup>41)</sup>。また「君の理想」では、多くの青年にとって、公に宗教を実践することは骨の折れることであるが、恐れることなく宗教的確信を公表することは必要だ。塹壕にやってきた今こそ、自分の理想について考え、魂を救えと言う<sup>42)</sup>。そして「君の将来」では、自分がしたいようにはできない状況に青年が置かれていることに理解を示す。しかし青年は、あくまでも一時的に兵士になっただけであり、将来は神のなざりたくなるのだ。今こそ自分の性格にとっての敵を知れ、強い男になれ、と呼びかける<sup>43)</sup>。

また自己犠牲を払うことについても、1項目割いている。好きなこともできない野戦での生活は大変で自分が修道士であるかのように思えるだろうと述べつつも、トマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』を引用し、犠牲を払

---

39) 『光線』Rayos de Sol はレミヒオ・ビラリーニョ・ウガルテが創刊した定期出版物である。ビラリーニョは、ビルバオで活動したイエズス会士であり、キリスト者の心の琴線に触れるような、人を引き込む明確な文章を書くことで有名であった。Manuel REVUELTA GONZÁLEZ: *La Compañía de Jesús en la España contemporánea. Tomo II. Expansión en tiempos recios (1884-1906)*, Madrid, UPCO, 1991, p.1088.

40) L. URTEAGA: “Tu puesto”, *En tu mochila*..., pp.21-22.

41) L. URTEAGA: “Tu religión”, *En tu mochila*..., p.23.

42) L. URTEAGA: “Tu ideal”, *En tu mochila*..., p.25.

43) L. URTEAGA: “Tu porvenir”, *En tu mochila*..., p.26.

うことに喜びを感じることができなくとも、少なくとも文句を言わずにいるようにと言う。戦争で体験する、困難を克服のための精神的エクササイズを通じて、将来の計画において失敗することがないように努めることができるだろうという<sup>44)</sup>。

その上で、次のように続ける。この戦争は階級の戦争と呼ばれるべきではない。この戦争にはもっと高貴な意味がある。私たちの祖国に存在する超自然的な秩序の全てを否定する共産主義を消滅させるために戦うのだ。多くの貧しい人々は、宗教とは富める人々にだけ許される贅沢であると考えた、なぜならば富める者の人生は意気揚々としており、彼らは他のスポーツや趣味などと同じようにを宗教に時間かけることができるからである。そこでウルテアガは裕福な人々の宗教に対する惰性的ふるまいへの批判を忘れない。多くの富める者は宗教を個人的なものとし、日曜日の30分ほどを費やすだけで、感情的な思い出の崇敬心に閉じこもり、なりゆきで実践していると非難する<sup>45)</sup>。

このようにして、戦争に参加する青年たちの心を静めようとする一方で、徐々に、より細かく、戦地にあって本来的にはどのような宗教生活を送るのがよいかを述べるのである。

### 青年の克己心を醸成するための模索

ウルテアガの行間からは、読者である青年と女性との関係について彼が懸念を抱いているのが伝わってくる。項目「人生の法則」では、青年をゆくゆくは家庭をつくるように生まれついている者としてとらえてはいるが、将来のできごととしてあるべきものを先んじて乱用することのなかに喜びを探すなら、後悔と悲嘆のみを感じるだろう、と言う。愛することは罪ではない、ご両親も愛し合ったのである。しかし、青春の宝である純潔を奪うものには用心を怠るなど述べる<sup>46)</sup>。母親と恋人とを比べてみることを勧め、将来生まれてくる

44) L. URTEAGA: "Tus sacrificios", *En tu mochila*..., pp.27-28.

45) L. URTEAGA: "Religión social", *En tu mochila*..., pp.71-72.

46) L. URTEAGA: "Tu enemigo", *En tu mochila*..., p.34. この項目内容の一部は、既に述べたピラリーニョの著作からの援用である。

自分の子供たちが幸せな家庭で暮らせるか、悲劇の中に生きるかは青年の行動次第だ、という<sup>47)</sup>。

青年は、生きるうえで困難を打ち負かしていかなければならない。人生を勝ち取るためには、まずは自分自身の欲望に打ち勝つようにしなければならない。ここで想定されている敵は青年自身、である。ウルテアガは、道を外れることがあるのが人間だといいつつも、自分のことだけを考えて、肉体的に本能を満たすことに自分のすべてを従わせるようなエゴイズムによって得られる満足感は罪であるとする<sup>48)</sup>。そしてあらためてピラリーニョの主張を援用して、純潔という若い宝を大切にしようにと述べる<sup>49)</sup>。純潔は女性だけのためのものではない。敵を打ち負かすため自分の内に意思と強さを秘める者だけが勝利するのだ<sup>50)</sup>。自分の弱さを知ることは大事であり、自分自身のために、また同志のために祈れ、という。そうすれば、男たちによる戦争の勝利は神の物になる、と結ぶ<sup>51)</sup>。

このように、自分の欲望を抑えるために、頻繁に祈ることを勧める。そしてそれでも良心の呵責に耐えかねることが起こりうると想定するウルテアガは、項目「君の告解」で、自らの限界を乗り越えるために、戦場では従軍司祭と緊密に話すように勧める。従軍司祭を、兵士の良心にとっての赤十字病院にたとえている<sup>52)</sup>。そして項目「君の天国への黄金の鍵」では、前衛にいれば、敵の奇襲攻撃を受けることもあるだろうし、魂が動揺することもあるだろう、そんな場合には早めに告解するように、と書いている。もしも死が目の前にあるなら、完璧な悔悛の行為をせよ、心を痛めて、もう罪を繰り返さないと悔悛することで十分大罪から救われる、というのである<sup>53)</sup>。また、「君のミサ」では、

---

47) L. URTEAGA: “Tu novia”, *En tu mochila*..., p.37. この項目内容は『しるし』に転用されている。Ver: *Signo*, num.24, 8 mayo 1938, p.4.

48) L. URTEAGA: “La ley de la vida”, *En tu mochila*..., pp.32-33.

49) L. URTEAGA: “Tu enemigo”, *En tu mochila*..., p.34.

50) L. URTEAGA: “¿Debilidad?”, *En tu mochila*..., pp.35-36.

51) L. URTEAGA: “Tus oraciones”, *En tu mochila*..., pp.39-40.

52) L. URTEAGA: “Tu confesión”, *En tu mochila*..., pp.41-42.

53) L. URTEAGA: “Tu llave de oro del cielo”, *En tu mochila*..., pp.43-44.

塹壕におけるミサは非常に簡素なものであろうが、それにあずかれれば最良の贖罪になるとも続ける<sup>54)</sup>。日曜日には、もしくは司祭がミサをたてようとするときには、ご聖体をいただくことを推奨し、そのような行動は他の多くの人々を励ます例にもなるだろうと述べて、周囲の見本となるよう提案している<sup>55)</sup>。このように、ミサの中で罪を認めて赦しを願うことを勧めているのである。

#### 前衛での戦いに直接関係ない項目の挿入の意味

しかし、前衛に生きる青年の魂の持ちようばかりに言及しているわけでもないのが、このパンフレットの特徴である。「青年たちの脱走」「教区の青年」「教区青年部における若者の人格形成」の3項目では、ウルテアガは前衛で参戦する青年とは直接的には関係ないと思える、現実に教区教会で起きている青年たちの教会離れの現象と、教区教会の「青年部」に課せられた全人教育のあるべき姿について説明する。11歳か12歳くらいで荘厳なかたちでの聖体拝領を受けたのちに教会から離れてしまう青年とその家族がいることについて、バルバオ出身のイエズス会士ホセ・アントニオ・ラブルの講演記録を引用しながら嘆く<sup>56)</sup>。そして14歳で多数の青年が学校教育を離れて日雇い労働者となると、教区教会からも離れてしまうこと、その後の工場などでの生活が青年の心性に大きく影響を与えることを指摘する。だからこそ教区教会の「青年部」は、青年のひとりひとりに手を差し伸べ、生活を成り立たせる上での困難においても喜びを与えられる組織、品行方正に生きることができるよう、青年の人格形成を行う組織であらねばならないと論じる<sup>57)</sup>。「青年部」の聖職者顧問は青年

54) L. URTEAGA: “Tu misa”, *En tu mochila*..., pp.45-46.

55) L. URTEAGA: “Tu comunión”, *En tu mochila*..., pp.47-48.

56) “La deserción de los jóvenes”, José Antonio LABURU: *Deberes de los patronos. Conferencia pronunciada en el Teatro Coliseum de Madrid el 27 de mayo de 1934*, Madrid, Apostolado de Prensa, 1934. ラブルは1887年生まれ。内戦期には宣教師としてアルゼンチン共和国、プエノス・アイレスを拠点としていた。スペインのみならず、ラテンアメリカ地域でも霊操指導者として有名であった。

57) L. URTEAGA: “La Juventud parroquial”, *En tu mochila*..., pp.75-76.

たちが義務教育を終えてしまう前に、候補会員部門に彼らを導き人格形成を行うようにせよ、そうすれば工場に行っても、教会の社会的意義を忘れることなく生きる在俗の使徒になるはずだ、という<sup>58)</sup>。このような内容は、兵士としての青年へ向けて書かれたというよりも、「青年部」におけるウルテアガ自身の取るべき行動についての戒めでもあると読める。

「青年部」出身者としてこうあるべき、という青年像について

教区教会での「青年部」候補会員部門に言及したあとには、「青年部」会員の前衛でのふるまいについてあらためて提案する。項目「憎むな」では、「青年部」が発行した宣伝ビラ『赦し』から引用して、なんじの敵を愛せ、という聖書の語句をとりあげる。そのうえで、「青年部」の使徒として、塹壕にいるならば、たとえ敵であっても魂を救わなくてはならないと述べる。

包圍戦が行われたトレードのアルカサルでの英雄として有名になった「青年部」メンバー、アントニオ・リベラの「撃て、けれど憎まずに撃て。」ということばも引用する。またバスク地方サン・セバスティアンで1936年9月に銃殺された政治家ビクトル・プラデラが、自分の銃殺直前にキリストが敵を許したことになぞらえて民兵たちを許したという逸話を語る<sup>59)</sup>。

項目「残酷になるな」では、キリストは、報復を好み復讐を楽しむような異教的な質の悪い喜び方を禁じていると言及する。「新しいスペインの精神を窒息死させてしまうことになる」ような野蛮なことは、「青年部」メンバーが行うべきことではないとする<sup>60)</sup>。

ウルテアガは、「青年部」教区セントロでの活動がいかに熱気にあふれていたか、そこででの信仰心の育成が心地の良いものだったかを思い出させるため、戦地の苦しい状況と対比する。どのような状況にあっても、「青年部」のメン

---

58) L. URTEAGA: “La formación del joven en la Juventud Parroquial”, *En tu mochila*..., pp.77-78.

59) L. URTEAGA: “No tengas odio”, *En tu mochila*..., p.79.

60) L. URTEAGA: “No seas cruel”, *En tu mochila*..., p.81. 部分的に『しるし』からの引用であるとする。 *Signo*, núm.7, abril 1937, p.4.

パーは率先して任務を果たす一方で、ロザリオをとさえ、従軍司祭を手伝うようにと呼びかける。まさに「使徒になれ」というのである。助けを求める者の相談にのり、けが人を介護し、死にゆく者に付き添うようにという<sup>61)</sup>。項目「君の使徒職」では、他の人々にキリスト者として、理想のすばらしさを伝える聖なる野心が必要であるという<sup>62)</sup>。青年読者に、人生をかけて他者のために尽くすことを求める一方で、その時々状況にあわせて率直に行動する必要性を説いてもいる<sup>63)</sup>。項目「よき人間であれ」では、他人に対して接するときには、皆に対してよい人、接しやすい人であるようにと勧める。そのためには、ちょっとしたことは、笑顔、親しみのこもったジョークなどを使うのがよい。任務を代わったり、たばこをあげたり、ちょっとしたことでも、受けることよりも与えることに意味があるのだ、という。そういう意味では戦争は、エゴイズムをたたきつぶすきっかけともなるだろうと論じる<sup>64)</sup>。

「仕えよ」と呼びかけるウルテアガは、戦争において自分のなかにあるものを伝えたいと考えるなら、自分から皆のために仕えるようにすること、そうすれば自分の弟子、友人となる人々がでてくる、という<sup>65)</sup>。そのためには、自分自身が明るい人間であることは重要である、そうでなければ魂の征服もできないであろうと続ける<sup>66)</sup>。またグループでいるときの会話で、軍隊にありがちな下品なことが話されるようなときには、それに対して攻撃的になるのではなく、うまくかわして、自分の周りの人と別の話題を話すなどの工夫が必要だという。階級が上がっていけば、より強く出ることもできるであろうと述べ

61) L. URTEAGA: “Sé Apóstol”, *En tu mochila*..., pp.82-83. 『しるし』からの部分引用であるとする。Signo, núm.5, diciembre 1936. 兵士たちからの手紙を参考をしていると思われる。

62) L. URTEAGA: “Tu apostolado”, *En tu mochila*..., p.84.

63) L. URTEAGA: “Sé sincero”, *En tu mochila*..., p.85.

64) L. URTEAGA: “Sé bueno”, *En tu mochila*..., p.86. ベルギーのJOCが発行したマニュアルを参照していると付記されている。

65) L. URTEAGA: “Sirve”, *En tu mochila*..., pp.89-90.

66) L. URTEAGA: “Sé alegre”, *En tu mochila*..., p.88.

る<sup>67)</sup>。ともかくも、皆と中立的に話し、キリストの友人としての率直な言葉遣いをすればよいという<sup>68)</sup>。宗教的な議論を相手に吹きかけることをしてはならない。真実が勝利をおさめるかどうかかわからないような論争に入ってはいけない<sup>69)</sup>。このようにウルテアガは例を挙げながら淡々と説く。

### 実戦における死の受容とそれを支える精神的支柱

軍では功績をたてることにより昇進する。つまり兵士には、作戦の遂行における功績をあげる必要があり、そのためには時に敵を殺害しなくてはならない。しかしウルテアガは敵の殺害には触れずに、昇進の件を前面にだす。そして、項目「君の昇進」では、伍長や軍曹に任じられた場合は、それを受けるべきである、とする。軍の命令系統の一翼を担うため、また使徒としての信望を示すためにも必要なことであるからだ。そのようなプロセスを経ることで、普通の生活にもどったとき、自分の中に人を指導できる資質が備わっていることに気がつくだろうと結論づける<sup>70)</sup>。

項目「君の従軍司祭<sup>パートル</sup>」では、軍における従軍司祭は、教区における教区司祭のようなものであると定義する。戦争中、ミサを執り行うことはもちろん、兵士の宗教的实践を助け道徳的な支えとなってくれる存在である。よって、青年読者に、部隊の宗教生活を活発なものにするために、親しみのこもった信頼感のある雰囲気の中で従軍司祭が組織する全てを助けるようにと命じる。戦争中は従軍司祭こそ青年にとって初めてのそして最良の友人となるのだという<sup>71)</sup>。そして優れた従軍司祭の例として、第一次世界大戦に従軍して戦死したアイルランド人司祭ドイルに言及する<sup>72)</sup>。

67) L. URTEAGA: Tus conversaciones”, *En tu mochila*..., p.91.

68) L. URTEAGA: “El apostolado de tu palabra”, *En tu mochila*..., p.92.

69) L. URTEAGA: “Las discusiones religiosas”, *En tu mochila*..., p.93.

70) L. URTEAGA: “Tu ascenso”, *En tu mochila*..., p.94.

71) L. URTEAGA: “Tu Páter”, *En tu mochila*..., pp.95-96. 「パートル」は特に「レケテ」と呼ばれるカルリスタ軍の流れをくむ部隊で用いられた従軍司祭を意味する語である。

72) Alfred O’ RAPILLY: *Vida del P. Guillermo Doyle, SJ*, 1929

ウルテアガは他者に「寛大であれ」と続ける。戦争は長期化しつつあり、一連の我慢が兵士たちに深い傷をのこしているのが現状である。魂も肉体と同じように疲労する。しかし魂が眠り込んでしまったままにしてはいけない、本当に戦争に勝つためには、敵にも自分自身にも勝たなければならない。苦しみの後にスペインを解放する栄光を見ることになるのだから、そのときのために、広い心を持ちなさいというのだ。戦争における勝利に言及して、飛行機や進撃部隊が新しいスペインの地を切り開くだろうと述べるのだが、戦いのあとには新しい都市を建てなくてはならないのであり、キリストの使徒が必要とされるという。君もその使徒となるべき一人なのだ、神の栄光のために戦争に勝ち世界を征服せよ、と青年読者に呼びかける<sup>73)</sup>。

そして、幾分唐突ではあるが、項目「修道士…?」でアクション・カトリカ全般に言及するのである。教皇ピウス 11 世が招くアクション・カトリカとは、在俗の平信徒のものである。ただし神に自分を任せることのできる人である必要がある。そしてこの団体の将来の繁栄を見通し、20 世紀においてアクション・カトリカはたくさんの聖人を生むであろうと述べる<sup>74)</sup>。

さて、パンフレット『君の背囊のなかに…』では、終わりの 4 項目「勇気を持って」「君の死」「君の死はどのようであろうか」「君の勝利」をもちいて、ウルテアガは、戦闘における読者自身の死の可能性について語る。

「勇気を持って」では、戦争中は、通常以上に努力しなければならないことも多いとする。上官への服従だけではすまない。難しい作戦遂行の折には、勇気ある者たちが現れる。もちろん実行できるかどうかを計り、行動する。自殺行為になってはいけない。命は自分のものではなく、神のものなのである。青年には神が呼びになるまでの命が預けられている。どのように戦うのが望ましいのかという点にも言及し、ビスカヤ地方のビスカルディ占領作戦におけるアンフィロキオ・ゴンサレス伍長の働きを例に挙げる。彼は被弾しても部下に命令し続け、無理やり戦闘からひき離させねばならなかったほど勇敢であった

73) L. URTEAGA: “Sé generoso”, *En tu mochila*…, pp.99-100.

74) L. URTEAGA: “¿Fraile…?”, *En tu mochila*…, pp.101-102.

とたたえるのである<sup>75)</sup>。

「君の死」では、スペインの勝利の日に、祖国の大地が君の血で覆われる時が来たとしたらと仮定する。それは人生の変化であるが、死は悲劇ではないのだ、と説く。ウルテアガの言い分としては、キリスト者の人生には2つの時があるということである。ひとつはこの世での、試みの時であり、もう一つは天国における時である。死後も永遠に生きるために生まれてきたのであって、青年兵士が倒れるときは、キリストと同じ栄光に満ちていると述べる。そして、死ぬことよりもひどいのは、義務が命を犠牲にするように求めているときに生きのびることであるという。そのような、犠牲的な死を前にした人々の例として、イエズス会士フランシスコ・ガルシア・アロンソが、マラガ監獄で翌日処刑される人々と共に過ごした経験に言及する<sup>76)</sup>。彼らが穏やかであったことをのべ、神との義務を果たし、また祖国との義務を果たした時には心の平安を感じるのとは当然のことだと言うのである。ウルテアガは、はじめに神、つぎに祖国がある。そのほかの、人生、妻、子どもたち、良心、将来の夢、キャリアなどはすべて従属的なものである、と記す<sup>77)</sup>。

そして、自分の死に臨む時には、それは勝利であることを確信するように論ず。ウルテアガは、どんなに目立たない持ち場があてがわれても、青年兵士は勝つだろう、という。無名の英雄としての死を迎えたとしても、実際にその死によって救われた祖国の中心で、神は永遠の命を青年に与えるのだというのである<sup>78)</sup>。

おわりに

『君の背囊のなかに…』は、バスク出身の司祭ウルテアガによって、戦争にむかう「青年部」の会員にむけて執筆されたパンフレットであった。書き下ろ

---

75) L. URTEAGA: “Sé valiente”, *En tu mochila*…, pp.103-104.

76) Francisco GARCÍA ALONSO: *Mis dos meses de prisión en Málaga*, Sevilla, Tip. De M.Carmona, 1936.

77) L. URTEAGA: “Tu muerte”, *En tu mochila*…, pp.105-106.

78) L. URTEAGA: “Tu victoria”, *En tu mochila*…, pp.109-110.

しの部分もあるが、文章のなかには他の書籍や雑誌からの転載も多くみられる。「青年部」の機関誌『しるし』をはじめ、「青年部」が出した宣伝ビラや、「青年部」のなかで理想的メンバーとして知られていた人物に関する伝記などからの引用が目立つが、『キリストにならいて』といった精神修養のための古典中の古典ともいえる書物に言及した部分もある。教皇ピウス 11 世回勅『ディヴィニ・レデンプトリス』にも主張の根拠をもとめ、また「宗教は単なる儀式ではない」という項目に限っては、引用元が聖書に集中している<sup>79)</sup>。

本パンフレットでは内戦ということばは用いられていない。あくまでも、全世界を脅威に陥れている共産主義に対する戦いとして、戦闘を必要悪として正当化する。当時のスペインにおける戦争の原因、諸悪の根源は共産主義であり、教皇ピウス 11 世も共産主義を打破するための戦いを認めているのだから、「青年部」のメンバーはどうしても出征しなければならないのだ、と論じる。

敵としての共和国陣営について具体的に言及する箇所は非常に少ない。共和国陣営側についてバスク・ナショナリスト党を名指して非難することもなければ、他方では、フランコ陣営側で戦うカルリスタやファランヘなどといった政治勢力についても触れられておらず、一般的に論調は、少なくとも表面上は「非政治主義」を貫いているといえよう。

このパンフレットの出版時には、両陣営ともにすでに多くの血が流されていた。フランコ陣営を支持する平信徒や聖職者が、共和国陣営によって殺害された平信徒や聖職者の人生について「聖人伝」のような伝記を書き始めていた。その中では死者は殉教者として捉えられ、また反共和派の言説を広めるために用いられた。しかし、この『君の背囊のなかに…』では前述の「殉教者」にはスペースを割いていない。確かにトレド司教区における「青年部」の主要メンバーであったアントニオ・リベラの伝記からの引用はみられる。しかし、それは彼の死をたたえる引用ではなく、前線においてどのような気持ちで

79) 平信徒としての義務を果たす必要性について述べるため、ヨハネ福音書 13 章 35 節、ルカ福音書 16 章 22 節、マタイ福音書第 5 章 23-24 節、ローマの使徒への手紙 12 章、ヨハネの手紙 3 章 17 節、同 4 章 20 節などを用いる。

人を殺害するかを説いた箇所の引用である。「先輩」の行動を示すことで、「青年部」関係者である青年兵士の心理的負担を少しでも回避できないかと考えたことによる方策であっただろうと思われる。本パンフレットでは、戦いの前線に勇ましく挑む青年平信徒は想定されておらず、むしろ敵を殺害することを躊躇する彼らの姿が浮かんでくる。だからこそ彼らに日々祈ることを勧め、敵を死に追いやる可能性や自らの死の可能性に対峙し、キリスト者として臨めるようにとの願いをこめて、淡々と描かれているように思える。その上で、たとえ死ななければならないとしても、神によってもたらされるその死は無駄ではないと論ずるのである。

このパンフレットでは、反乱軍陣営で広く見られがちであった、教会の勝利を高々と預言的に喧伝するための単語をつかうことを避ける傾向が明らかに見て取れる<sup>80)</sup>。そのような姿勢からは、聖職者が想像力を駆使して戦争に出ていく青年平信徒の立場にたとうとしつつ記述を試みた跡を読み取ることができ

る。また、文章中、体系的になってはいないが、戦争から戻り「青年部」を復興させる活動に加わるように求める記述もみられる。その意味で、反乱軍陣営の勝利で戦争が終結するという仮定はゆるがないが、その後平信徒がアクション・カトリカを改めて自分の使徒職と理解し、受け入れ、活躍する世界が建ち現れることを願って書かれたパンフレットであったといえよう。

---

80) たとえば、使用された約1万8000語のうち、「勝利」に関係する語は名詞・形容詞・動詞すべてで11回の使用、殉教者は1回、英雄は4回、という状況である。

¿Qué les pedían los sacerdotes de la retaguardia a los jóvenes católicos que estaban en el frente de la Guerra Civil de España?

-Un análisis del texto del folleto “*En tu mochila...*”

J. Chiaki WATANABE

### Resumen

Este artículo analiza el contenido del folleto “*En tu mochila...*”, publicado en 1938 por la Editorial Social Católica (Vitoria, España). El autor, Leonardo Urteaga, era un sacerdote diocesano de la Diócesis de Vitoria, colaborador fiel de la Juventud de Acción Católica (JAC). Escribió el folleto para animar a los miembros de la JAC a aguantar la dureza de la vida militar en las trincheras, y que no se sintieran culpables de matar en el frente. Intentaba enseñarles, también, cómo aceptar la muerte de compañeros y de ellos mismos, porque, al fin y al cabo, todo sería voluntad de Dios por servirle.